

南河内第二中学校区

【目指す子ども像】

- 〈まなび〉主体的に考え、学び合いを通して互いに高め合える子ども
- 〈ころろ〉思いやりの心を持ち、自他を大切にできる子ども
- 〈からだ〉心身の健康に関心を持ち、たくましく実践できる子ども
- 〈ちいき〉社会に貢献し、地域に主体的に参画しようとする子ども

【実践研究課題】

〔理数教育〕

理数教育の充実と推進を通して、思考力や表現力の向上を図り、自ら課題を持ち、共に学び合い、深い学びに向かう子どもを育成します。

各部会の取組

<授業研究チーム算数・数学部会>

【児童生徒の実態】

学習に対する興味関心が高い児童生徒が多い。また、算数・数学科においては基礎的・基本的な知識や計算技能を高い水準で身に付けている児童生徒も多い。一方で、自分の考えをもってはいるが算数・数学的な表現を用いて適切に表現することが苦手な児童生徒がいる。また、各種調査の結果から、説明を求められる問題では、説明の途中で諦めてしまう、または無解答の児童生徒が一定数見られた。以上のことから、事象を数理的に考察し、根拠を明確に筋道立てて説明する活動を通して、算数・数学的表現力を身に付けさせたいと考えた。

【部会のねらい】

数学的活動を通して、自ら課題を持ち、事象を数理的に考察したり、根拠を明らかにして筋道立てた説明を行ったりすることで、算数・数学的な表現力を育成する。

視点	<A> 教育課程の 工夫改善	 教育活動の 連続性の確保	<C> 教職員間の 連続・協働	<D> 家庭・地域との 連携・協力
----	----------------------	------------------------	-----------------------	-------------------------

取組	①昨年度の取組を踏まえ、数学的に考察したことをまとめたり、説明したりする活動を通して、児童生徒の算数・数学的な表現力の向上を図る。 ②各々の実践事例を持ち寄り、指導法について討議し、学び合う。 ③3年間の取組について、総括する。
成果	・解決の道筋を立ててから課題に取り組む児童生徒や根拠を意識した説明を心がける児童生徒が増加した。 ・説明や証明の場面で、「算数・数学言葉」を正しく使おうとする意識が高まった。 ・実践事例を持ち寄り、指導者が交流することで、自校の授業に生かそうとするなど意欲が高まった。 ・3年間の実践研究を通して、授業で様々な数学的活動を実施し部員間で共有することができた。
課題	・基礎的・基本的な知識や技能を確実に定着させるなど、土台作りをしていく必要がある。 ・単元計画に、数学的表現力、思考力を向上させる授業を位置付け、各単元で確実に実施していく必要がある。 ・3年間の実践研究を通して、数学的表現力と数学的思考力は、相互に影響しながら質的に高まることを実感した。児童生徒の知的好奇心を高め、自ら課題を発見する態度を育むために、指導者が適切に課題を出したり発問したりしていくことが重要である。

<授業研究チーム理科部会>

【児童生徒の実態】

知的的好奇心が高く、理科の知識も豊富で、理科の授業に意欲的に取り組む児童生徒が多い。一方で、実験・観察における器具の扱い方に自信をもてない児童生徒が目立つ。また、日常生活の中で生じた疑問や課題を理科で学んだことを生かして解決していく場が少ない。

【部会のねらい】

安全に実験・観察を行うための基本的な知識の習得を目指すとともに、理科の授業の中で、「科学的な見方・考え方」を用いて「予想→実験→結果→考察」を行い、自ら立てた予想から必要な実験を考え、課題を解決できる児童生徒の育成を目標とする。

視点	<A> 教育課程の 工夫改善	 教育活動の 連続性の確保	<C> 教職員間の 連続・協働	<D> 家庭・地域との 連携・協力
----	----------------------	------------------------	-----------------------	-------------------------

取組	①ICTの積極的な活用を図り、有効な動画を活用したり、演示実験の効率的な見せ方を工夫したりする。 ②課題を解決する為に必要な実験を、児童生徒の予想や発言をもとに設定し、自ら課題を解決する力を育む。 ③思考ツールを活用し、学習の見通しをもたせる。 ④考察の型を提示し、結果から考察することを苦手とする児童生徒も記入できるように支援を行う。
成果	・ICTの積極的な活用により、技能を定着させることができた。また、コロナ禍でグループ活動を行うことが難しい中でも、写真や動画で器具の詳細を映し出すことで、理解へと繋げることができた。 ・自ら課題を解決する力を育成するために、課題解決を行わせた。「課題→予想→結果→考察」の流れが分かりやすいような思考ツールを用いて、見通しをもって学習することで探究的な課題に積極的に取り組む児童生徒が増えた。
課題	・考察を苦手とする児童生徒が多かったため、考察の型を小・中学校で共通して活用した。3校の実情に応じた型を用いて、考察を書く力を身に付けさせることができた。しかし、考察を自分の言葉で書くためには、さらに型の定着と型を使って表現する力が必要と感じる。また、型が無くては思考・表現できるように継続して取り組む必要がある。

<学級づくりチーム>

<p>【児童生徒の実態】</p> <p>知的好奇心が高く、学習意欲が高い。学習・生活両面が安定している児童生徒が多いが個別指導が必要な児童生徒も少数おり、学習に限らず学級経営にも工夫が必要である。興味のあることに主体的に取り組むが、集団に対しては関心がやや薄い傾向もみられ、グループや学級といった集団で協同的に課題解決に向かう意識や能力がやや低い。</p> <p>【部会のねらい】</p> <p>「学び合う仲間としての学級で常に支え合って目標にチャレンジし、友達との豊かな対話を通して、規律を守り安心できる環境の下で協調的な関係を創り出す力」を育てるために、以下のことを進める。</p> <p>①「学級力向上」の研修 ②各学校・学級における「学級力向上」の実践と分析・手立ての検討</p>
--

視点	<A> 教育課程の工夫改善	 教育活動の連続性の確保	<C> 教職員間の連続・協働	<D> 家庭・地域との連携・協力
取組	①全学級で学級力アンケートを実施し、レーダーチャートを基に学級で話し合わせる。 ②「学級力向上プログラム」について研修を行う。 ③担任から見た、学級での話し合いの様子や児童生徒の変化・課題等を話し合う。 ④今年度の研修内容を評価し、次年度の内容を検討する。			
成果	・年間3～4回の学級力アンケートを実施し、学級の「よいところ」に目を向けた話し合いをした結果、よいところを更に伸ばそうという意識が育ち、多様な意見を引き出すことができた。 ・年度初めに、「学級力向上プロジェクト」の資料を基に、学級力アンケートの目的や意義、実施方法について研修を行い、共通理解を図ることができた。 ・「よいところ」に目を向けた話し合い活動を行った結果、更によりよいところを伸ばすための具体的な目標を児童生徒と共に考え、実践することができた。「学級をより良い方向に向けられる」という、教師の確かな手応えを実感することができた。 ・次年度以降も、学級の「よいところ」に目を向けるという視点で、学級力アンケートを年3～4回実施する。 ・家庭学習強調週間を年3回実施し、保護者の協力を得ながら家庭学習の習慣化を図ることができた。			
課題	・学級力アンケートについて、調査の目的や意義を教師が共通認識し、子どもに明確に伝えられるようにする。また、指導方法や分析の仕方・手立てについて3校で情報を共有し、共通認識で取り組んでいく。 ・学校生活アンケートやQUアンケートなど、実施するアンケートの種類が多く、煩雑になってしまう面がある。			

<道徳教育チーム>

<p>【児童生徒の実態】</p> <p>本学区の児童生徒の保護者には他地域出身者も多く、将来的には県外への移動の可能性が高い家庭も多い。そのため、地域の伝統や文化への関心が高くない傾向が見られる。児童生徒も学校での活動以外に、地域の伝統や文化に触れる機会は少なく、郷土への関心や愛着はあまり高くないという実態が見られる。</p> <p>【部会のねらい】</p> <p>身近な地域についての理解を深め、愛する心を育てる教育活動推進のための取組を考え、実践していく。</p>

視点	<A> 教育課程の工夫改善	 教育活動の連続性の確保	<C> 教職員間の連続・協働	<D> 家庭・地域との連携・協力
取組	①各学校での郷土愛を深めるために行った道徳教育の実践(授業実践、イベントなど)(道徳科以外の教科でも実践報告可)<B、D> ②カリキュラムマネジメントシートを活用し、地域連携や郷土愛に関することを中心に関連付けを図り、校区内で共有する。特に他教科において郷土愛や地域連携を図ったところを確認する。<A> ③各校ごとに児童生徒・保護者・地域への啓発に努める。(ホームページの活用など)<D>			
成果	・道徳科以外の他教科や特別活動でも郷土愛を深める活動を積極的に行うことができた。このことにより、児童生徒が郷土愛を深めることにつながった。 ・各校で別業を基にした郷土愛と地域連携に特化したカリキュラムマネジメントシートを作成した結果、道徳科と他教科とのつながりが明確になった。このことにより、1年間の学びを見渡すことができ、教師自身が郷土愛や地域連携を意識した教材作成などをすることができた。			
課題	・今年度は教科横断的なカリキュラムマネジメントシートの作成に留まった。次年度は学年を縦断するようなカリキュラムマネジメントシートを検討していくことにより、共通の地域教材を様々な学年で活用することでさらに地域を愛する心が育つと考える。			

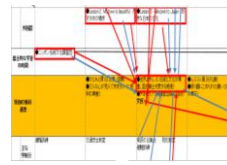
(数学科の授業)



(学級力アンケートを基にした話し合いの様子)



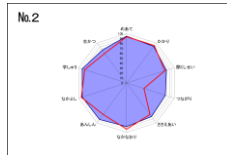
(カリキュラムマネジメントシートの作成)



(理科の授業)



(レーダーチャート)



(小中合同クリーン活動)



<心身健康チーム>

【児童生徒の実態】

- ・自主的に運動に励む児童生徒と、そうでない児童生徒の差があり、体育の授業では容易にけがをしてしまう児童生徒が見られる。
- ・立腰指導の効果は現れてきたが、「良い姿勢」を継続できる児童生徒はまだ少ない。
- ・朝食を食べる児童生徒の割合は高いが、内容に関して課題のある児童生徒が見られる。また、食べてこない理由に、生活リズムの乱れを挙げる児童生徒が多い。
- ・保護者の健康や食への関心は全体的に高い。

【部会のねらい】

- ・体育での安全指導や身体の使い方について、小中の発達段階に応じた指導を行う。
- ・朝食摂取の充実と身体作りの意識の向上を図る。

視点	<A> 教育課程の 工夫改善	 教育活動の 連続性の確保	<C> 教職員間の 連続・協働	<D> 家庭・地域と の連携・協力
----	----------------------	------------------------	-----------------------	-------------------------

取組	①体育時の準備体操の仕方や、けがの多い跳び箱単元での予防のための工夫についてまとめる。 ②朝ごはん毎日食べよう週間の実施、朝食アンケートでの実態把握、朝食欠食児童生徒への個別指導を行う。 ③立腰指導の継続し、各校の学校保健給食委員会へ参加する。 ④「二中学区健康だより」を発行する。 ⑤11月に「体力向上月間」を実施し、保健だよりや給食だより、給食献立などで啓発を図る。
成果	・けがの多い「跳び箱」についてけが予防の指導を取り入れた。 養護教諭部・・・事前の指導資料作成 体育部・・・「跳び箱」に特化した準備体操資料の作成、場の設定の共有 栄養職員部・・・骨太(コツコツ)強化ウィークの設定(二中給食委員会による献立作成)
課題	・朝ごはんや生活習慣についての家庭への啓発、個別指導の継続 ・感染症予防を徹底しながらの体力向上月間や運動量を確保した体育の実施 ・各種目のけが予防についての周知

(けが予防のための提示資料)



(二中学区健康だより)



(朝ごはん毎日食べよう週間チャレンジカード)

朝ごはん毎日食べよう週間 チャレンジカード	密	取	獲	賞	優	優	優	優
氏名								
学年								
1日朝ごはんを食べた回数								
2日朝ごはんを食べた回数								
3日朝ごはんを食べた回数								
4日朝ごはんを食べた回数								
5日朝ごはんを食べた回数								
6日朝ごはんを食べた回数								
7日朝ごはんを食べた回数								
合計								

成果

- ・長期ビジョンに基づき、目指す子供像を共有し実践に取り組んだ結果、そこへ向かうための環境を、各チームが整えることができた。
- ・定期的に小中の教員が共に活動することで、教員同士の理解が深まった。さらに実践を通して、児童生徒同士、学校と地域のつながりが、強まった。

課題

- ・各学校の地域教材の情報を共有し、3校で計画的な実践を進める。(小小連携・小中連携)
- ・実践研究の重点教科が変わるので、これまでの成果を生かした実践となるよう工夫する。
- ・実践の目的や意義を、教師と児童生徒が共有し、活動の改善を進めること。